

～歯科治療とは下顎位の治療である～ 『咬合』をテーマとした研修会

日時：令和4年1月23日(日)

場所：京都キャンパスプラザ

講師：中野 喜右人副会長、甲斐 智之先生、藤原 康則先生



藤江 匠摩(滋賀県)



国内で新型コロナウイルスの新規感染者が約5万5千人に達する中、万全の対策を行い、令和4年1月23日、第3回関西支部研修会が開催された。

関東からは田中 譲治会長もお越しになり、参集16名、オンライン約40名の参加で始まった。

今回の関西支部研修会は「歯科治療とは下顎位の治療である」との考えのもと、適正下顎位を中心とした「咬合」をテーマとしての講習会となった。講師は中野 喜右人副会長、甲斐 智之先生、藤原 康則先生でした。

中野 喜右人副会長

演題「適正な下顎位を得るために」～咬合の捉え方～

- 1) 解剖学的・機能的な咬合
咬合・顎運動研究の歴史、咀嚼器官は医科ではみられ



ない多機能の臓器であり、咀嚼・嚥下・発音・呼吸・審美・姿勢の維持・stress management等を満たすために、どの様な解剖学的かつ機能的な咬合を与えるべきか。

- 2) 咬合器を使いこなす

正確な資料(フェイスポートランスファーチェックバイト)を採得することで咬合器装着時の正確な再現性、調整が少なく快適な補綴物を製作するためには複雑な顎運動を再現する咬合器の必要性、また選ぶならどの様に咬合器を選択、またその咬合器の使い方。

- 3) 医院における適正な咬合を与えるための治療の流れ

診査診断に際し一般的な検査以外に、筋触診・咬合器装着による模型分析・頭部エックス線規格写真・コンダイログラフによる機能分析等を必要に応じて取り入れ。

藤原 康則先生

演題「顎位の偏位による不定愁訴を考える」～患者の訴えとME機器のデータから読み取れること～



包括歯科臨床において重要な、炎症と力のコントロール。

患者の筋肉・骨格・咀嚼運動における個体差への対応、咬合面形態の考え方を臨床例を交えての解説。

TMD顎関節症における資料採得、症例別によるスプリント製作。

個体差の中で矯正治療が行われるべきであり、良い数値を目標にするべきでなく、解剖学的な顎関節の位置から、治療咬合位を導くことは、咀嚼運動や生体のバランスを考える上で、正常な咬合とは限らない。

生体は変化するものであり、常に患者の訴えに向き合い、原因と対策を考える。

甲斐 智之先生

演題「顎顔面包括治療の実践」～3次元6自由度診断による適正下顎位誘導～



咬合再構成症例に顎運動記録から得られたデータをもとに

咬合治療の解決の鍵である適正下顎位への誘導を可能にするためのプロビジョナルレストレーション調整で適正下顎位(CR)へと誘導し最終補綴物へと移行。電子機器による顎運動解析に留まらず、通常のビデオ撮影での開閉運動の記録から得られること、ゴシックアーチによる下顎位の記録の問題点、ドーンソンの問題点、1発CR誘導補綴完成はどのような問題を抱えているのか等、臨床例を通して解説。

日々行っている臨床の中で、咬合において習得しておくべき基本事項を中心に、それに加え筋の触診や顎運動機器による解析意義からどの様にすれば解剖学的にも機能的にも満足のいく咬合を与えられるか解説して頂きました。